

1. 〔馬行き人行き自転車行きて〕

宮沢賢治

馬行き人行き自転車行きて  
しばし粉雪の風吹けり

緋合羽につまごはき  
物囓むごとくたゝずみて  
大売り出しのピラ読む翁  
まなこをめぐる輻状の皺

楽隊の音からおもてを見れば  
雲は傷れて眼痛む  
西洋料理支那料理の  
三色文字は赤より暮るゝ

馬が一疋東へ行く  
古びた荷縄をぶらさげて  
雪みちをふむ  
引いて行くのはまだ頬の円いこども  
兵隊外套が長過ぎるので  
縄でしばつてたごめてゐる

政友会の親分の  
手を綿入の袖に入れ  
身内一分のすきもなき  
じろりと過ぐる眼はわびし

冬の陰影

緋の合羽にわらぢばき  
もんぱぼうしに額づゝみ

物囃むごとく売りだしの  
ビラに向へるまなこをめぐり  
皺はさながら後光のごとき  
眼のうす赤いぢいさんが  
読んでゐるのか見てゐるか

こたびはこども砂糖屋の  
家のこどもがスケートの  
手をふりまはしてすべり行くなり

自転車ひきて出できたるかな林光原  
出前をさげてひらと乗り  
走りて去ればはるかなる  
活動写真の暮れの楽隊

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房

1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

※〔〕付きの表題は、底本編集時におぎなわれたものです。

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

## 2. 対酌

宮沢賢治

嘆きあひ 酌みかふひまに  
灯はとぼり 雑木は昏れて  
滝やまた 稜立つ巖や  
雪あめの ひたに降りきぬ

「ただかしこ 淀むそらのみ  
かくてわが ふるさとにこそ」  
そのひとり かこちて哭けば  
狸とも 眼はよぼみぬ

「すだけのるは 孔雀ならずや  
ああなんぞ 南の鳥を  
ここにして 悲しましむる」  
酒ふくみ ひとりも泣きぬ

いくたびか 鷹はすだきて  
手拭は 雫をおとし  
玻璃の戸の 山なみをたゞ  
三月の みぞれは翔けぬ

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房

1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

※底本は、「作者専用の詩稿用紙に書かれた詩篇を収録し」、多くの詩篇で、詩稿の形式に合わせて上下に二句を配置し、字間スペースなどを調整して下の句の頭が横にそろうように組んである。この形を取っているこの詩篇では、句間を最低全角2字空けとし、下の句の頭を横にそろえた。

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

3.

宮沢賢治

森の上のこの神楽殿  
いそがしくのぼりて立てば  
くわくこうはめぐりてどよみ  
松の風頬を吹くなり

野をはるに北をのぞめば  
紫波の城の二本の杉  
かゞやきて黄ばめるものは  
そが上に麦熟すらし

さらにまた夏雲の下  
青々と山なみははせ  
従ひて野は澱めども  
かのまちはつひに見えざり

うらゝかに野を過ぎり行く  
かの雲の影ともなりて  
きみがべにありなんものを

さもわれののがれてあれば  
うすくらき古着の店に  
ひとり居て祖父や怒らん  
いざ走せてこととふべきに

うちどよみまた鳥啼けば  
いよいよに君ぞ恋しき  
野はさらに雲の影して  
松の風日に鳴るものを

底本：「新修宮沢賢治全集 第六巻」筑摩書房

1980（昭和55）年2月15日初版第1刷発行

入力：junk

校正：土屋隆

2011年5月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。